

へき地教育の三特性と学習指導要領との結びつき

へき地教育の三特性

- へき地性（へき地こそ体験活動の宝庫）
- 小規模性（小規模こそ個性を生かす大地）
- 複式形態（複式こそ自ら問題解決をする力をはぐくむゆりかご）

具現化

学習指導要領

「生きる力」の
キーワード

- 自然体験活動などの豊かな体験
- 個性を生かす教育
- 主体的に学習に取り組む態度

これからのへき地教育の展望として、第一に、ICT（情報通信技術）教育の導入がへき地教育に大きな変革をもたらすものと期待できます。ICTを活用することで、地理的条件に左右されず、遠隔地の学校と合同で学習することが可能になるためです。第二に、国がすすめている教育改革の柱「アクティブ・ラーニング（主体的・協働的な学習）」が、都市部の大規模校よりスピーディーに浸透するものと予想されます。小規模校には、組織の柔軟性と機動力があり、学びの多様化に十分対応できるからです。第三に、コミュニティ・スクール、いわゆる「地域とともにある学校づくり」がへき地教育に大きな影響を与えていると思います。これまで以上に、学校、保護者、地域住民が知恵を出し合い、学校の存続を議論する場が一層重要になってくるのではないのでしょうか。いずれにしても、激しく変化化する社会情勢の中、見通しを持って、

その反面、へき地教育には三特性「へき地性」「小規模性」「複式形態」という優位性があり、へき地の学校だからこそできる教育があります。発想を転換すれば、都市部にある大規模校にはできない教育の可能性があるということです。また、学習指導要領の基本的なねらいである「生きる力」の育成に強く結びつきま

へき地教育の展望

す。具体的には、児童生徒の一人ひとりの個性を生かす個に応じたきめ細かな指導、自学自習の経験を生かした自ら学び考える力の育成、豊かな自然環境を生かした教材や体験活動、地域住民と連携・協力した教育活動などがあります。これらがへき地・複式教育の大きな特色であり、生命線であると言ったことができます。



自己変革を遂げなければ、学校の活力低下、さらには統廃合の危機に直面すると思います。

教師に期待するもの

結びに、「教育は人なり」といわれるように、あくまで学校教育の最大の担い手は教師であり、その成否は教師にかかっています。教職を目指す明治大学の学生諸君には、この教育の原点を忘れず、どの地域の学校にあっても、未来に生きる子どもたち一人ひとりのために、夢と希望を持って努力する教師になることを期待しています。

学校教育の現場から



松田 孝一 KOUICHI MATSUDA



北海道豊富町立兜沼小中学校 校長

1960年 熊本県熊本市生まれ
1984年 明治大学二部文学部史学地理学科地理学専攻卒業
1989年 明治大学大学院文学研究科地理学専攻博士前期課程修了
2012年 北海道稚内市立富磯小学校長
2015年 現職



へき地教育の厳しい現状
本校は、北海道の利尻・サロベツ国立公園の北端に面し、広大な丘陵地帯にあります。寒冷な気候を利用した酪農が盛んで、「豊富牛乳」のブランドで全国各地に出荷されています。学校の歴史は古く、平成29年には開校110周年を迎えます。現在は小中併置校として、小学生9名、中学生6名の計15名が学ぶ、典型的なへき地にある小さな学校です。地域住民の

へき地教育の特色を生かして

教育に対する期待は大きく、子どもたちを地域の宝として大事に育てています。また、学校が地域コミュニティの中核を担っており、地域にとって大切な存在となっています。

ただ、本校を含めた周辺地域の教育状況は厳しく、過疎化や少子高齢化に伴う児童生徒数の減少に歯止めがかかりません。このため、学校の統廃合が大きな問題となっています。周辺町村によっては、同一町内に小学校、中学校がそれぞれ1校のみという地域もあります。いずれも望ましい教育環境の整備を目的として、学校の統廃合が進められています。遠距離通学や人間関係の希薄化、そして学校がなくなることによる地域の衰退など課題が山積しています。

へき地だからこそできる教育 ピンチをチャンスに

へき地学校は、少人数であることから、一般的に、次のような課題があります。人間関係が固定化して社会性や向上心、競争心が育たないこと、大きな集団での学習・話し合い活動が困難なことから思考力・表現力が育たないことなどがあります。